

「旅人であり寄留者」創世記47：27－31 9・16 I 28節に「ヤコブはエジプトの地で十七年生きながらえた」とある。ヨセフがエジプトに売られた時の年齢がちょうど17歳。ヤコブは、カナンでヨセフと17年過ごした。それと同じ年数、17年をエジプトで過ごすことができた。人生の激しい戦いの後に、神の慰め、励ましが備えられている。神の配慮がある。ヤコブは、戦いの多い人生を歩んで来た。そして今、神からの慰めを受けている。神を知るとは、どういう事か。それは決して聖書の知識の事だけではない。この地上の歩みにおいて私達に具体的に関わって下さる神を体験し、生ける神との人格的な交わりを深めていく事。聖書の神は、今この時も私達と共におられ、実際に働いておられる。ごく日常の歩みの中に神は臨在しておられる。ずっと味わって來たヨセフ物語の御言葉は、ごく普通の日常に臨在される神に焦点を当て、見えない背後からイスラエルの歴史を導かれる神の姿を伝えている。私達は信仰の目を持って私達の現実に働く神の御業を認めたい。II ヤコブは、147歳になって、自分の命が終わりに近づいた事を知り、ヨセフを呼ぶ。「もしあなたの心にかなうなら、どうかあなたの手を私のもの下に入れ、私に愛と真実を尽くしてくれ。どうか私をエジプトの地に葬らないでくれ。私が先祖たちとともに眠りについたら、私をエジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬ってくれ」：29，30。神と共に歩んで來たヤコブは、神に信頼し、神の約束を忘れていない。単なる生まれ故郷への拘りではない。神の約束の御言葉への拘り。ヤコブには神からの約束が与えられていた→「わたし自身があなたといっしょにエジプトに下り、また、わたし自身が必ずあなたを再び導き上る」46：4。カナンの地こそ、神がヤコブの父祖達に約束して来られた土地。この時のエジプトでの生活は實に良かった。ヨセフは、エジプトの王パロの側近として期待され、特別な待遇を受けていた。ヤコブを含めたイスラエルの家族はエジプトで豊かに繁栄していた。しかし、ヤコブは、そこで暮しがどんなに豊かであっても、それ以上に、神の御心、約束の御言葉を第一にしていた。私達は？エジプトは、彼らにとって寄留の地、一時的な滞在の地。神の約束と使命は別にあった。ここから学べること→私達は何を第一としているか。自分の欲望に従順か、御言葉、御心に従順か？御心とは、大きな選択の決断の時だけではなく、毎日の歩みの中で判断すべきこと。自分の状況が不利になるように見えて、神の御心の故に、御言葉の故に、神に従おうとする覚悟があるだろうか。それは、恵みのない律法主義ではなく、むしろ神に祝福される私達に与えられた特権。いつまでも自分の内側にある罪の欲求と御靈によって戦うことをせず、罪の生き方のいいなりになるなら真の成長はない。真の神の祝福を手に入れる事のないまま、空回りをした歩みを続けることになる。しかし、悔い改めるべき事を悔い改め、神の御心に従って

いく時、本当の意味で神の祝福、恵みを味わう。全面的に神に信頼し、神の前に誠実な信仰生活を始める時、神は私達を本当に祝福して下さる。神との深い交わりの祈り：「天のお父様。こんな私でも愛して下さるのですね。本当に感謝します。自分で背負っていかなければならないと思っていたすべての事をあなたが負って下さり、あなたが御手の内に導いて下さるのですね。私は、あなたを信頼します」。Ⅲ私達の今は、過去の歴史の積み重ねの上に据えられている。過去の祝福が今の私達を支えている。同時に過去の罪の悔い改めがなされず、今、悪影響が続く事もある。過去をきちんと整理すべき時がある。また将来の為に良い方向性を祈り求め備えるべき時がある。今を生きる私達は、過去と将来に目を向ける必要がある。その全体を神の祝福の約束で貫かれている事実を覚えたい。自分達の今の幸せだけを考えれば良いという事ではない。ヤコブが考えたことは、子供達へのメッセージでもあったと考えられる。「自分の墓は、決してエジプトではなく、カナンでなければならない」と主張した事で、子供達への大切な確認がなされた。神の約束、御心を忘れてはならないという事。子供達にも真の神への信仰が与えられ、継承がなされるように、あきらめず祈り続けたい。「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです…自分の故郷を求めていることを示しています。」ヘブ11：13，14。この御言葉を読む時、彼らが求めている故郷は、カナンの地と思ってしまう。ところが驚くべき御言葉が続く→「事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために（私達の為にも）都を用意しておられました」11：16。地上のカナンは、天の故郷の模型。この地上で、旅人、寄留者として生きるとは、最終の行き先が、天の故郷、最高に素晴らしい主なる神のみもとであることをしっかり覚えて、今を大切に主と共に御心を第一とし生きる事。神から与えられた地上での歩みをおろそかにするのではない。むしろ、地上での歩みのすべてを神は見ておられ、天で報いて下さることを覚えて、地上での神から与えられた自分の分（識別が必要）、使命を御靈によってしっかり果たす。「彼（モーセ）は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです」11：26。「私が世を去る時はすでに來ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今から、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。…主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」Ⅱテモ4：6－8